

地域社会にとっての音楽文化——石巻市の大沢楽隊をめぐる——

奥中康人（静岡文化芸術大学）

この十年くらい、近代日本において西洋音楽がどのように変容し、土着化したかということに興味を持っている。たとえば、幕末維新期に導入されたラッパや鼓笛隊、 brassバンドなどが、その後、本来の役割を逸脱し、どのように地域社会に定着したのか、各地で調査をしてきた。ラッパや鼓笛隊は、その土地のお祭りと結びつくことによって、現在も——あたかも民俗芸能のようになって——奏楽を続けているのだが、そのオリジナリティにはいつも感嘆させられる。今回報告するのは、石巻市の brassバンド、大沢楽隊についてである。

大沢楽隊は、宮城県石巻市北村の大沢地区を拠点とする brassバンドで、創立は 1925 年頃。地域の有力者が私財を投じ、村の青年たちに楽器を買い与え、小学校などの運動会で演奏をすることから始まって、以来八十余年。現在も北村小学校の運動会など、地域の祭りやイベントなどで活動を継続している（現在のメンバーは 2 代目か 3 代目で、平均年齢は 70 歳をこえる）。数年前 CD がリリースされ、テレビにも取りあげられたことから全国的に注目を集めた。

音楽史的な観点からみると、このバンドは、日露戦争前後に各地で誕生した小編成 brassバンド（ジンタ）の流れを汲むものであり、類似の楽隊はおそらく昭和 20 年代ころまでは、日本各地に存在していたとみられるが、現存する団体はおそらくこの大沢楽隊のみである。しかも、ヘテロフォニーの美学と評すればよいのだろうか、演奏の美的価値観にも独特なところがあり、直輸入型の西洋音楽とは違った別の受容のありかたを提示してくれる点でも、非常に興味ぶかい。

大沢楽隊の仕事は、学校放送設備の充実とともに急速に減少していった。テープやレコードによる音楽供給が、各地に存在したこの種の演奏団体を駆逐した一因であることは間違いない。だが、本格的な西洋音楽や日本伝統音楽こそが公認された文化であるというような認識を持つ人々が、こうした独特な音楽をレベルの低いものであるかのように評価していることも、大きい。たとえば、中央の価値観を身につけた学校の音楽教師なら、子どもたちが授業中に大沢楽隊のように歌い、演奏することを決して認めないことは容易に想像できるだろう。

地方の独特な文化の担い手と知識層のあいだの目に見えない対立は、ラッパを祭礼で用いる浜松や熊本にも共通してみられることである。各地の知識層は、個性的な音楽文化を軽く蔑視しつつ、どこの街にでもみられるような音楽文化を推進する。と、このようなお決まりのフレーズで、大沢楽隊の衰退と消滅を嘆き、文化の均質化を批判したくなるのだが、よく考えればこれもまた中央からやってくる者の価値観にすぎないのかもしれない、事態の複雑さに頭を悩ませる。